

優秀賞

工学院大学 藤木隆明研究室

浮遊住居 そして／あるいは遊牧民(ノマド)のためのユートピア

この作品では、あえてテーマより100年先の2107年の世界を舞台にしている。2107年、爆発的な人口増加と環境問題により人間は都市を放棄し、効率から非効率へ、集団から個人へとライフスタイルが移行した。この時代、人間は浮遊住居にて移動手段と住居を兼ねて生活している。浮遊住居は、床・壁・天井の区別はなく、パーソナルで簡素な居住空間となっている。



浮遊住居 そして／あるいは 遊牧民のためのユートピア

今世紀半ばにも到来するであろう深刻な環境変化と、人口の爆発的増大という未曾有の危機を乗り越えて、もし我々が無事22世紀を迎える事ができたとしたら、その時の社会や都市のあり方は、現在とは相当異なっているに違いない。

コンセプト 新たな交通システムの提案 - 価値観の転換に向けて

もし、行き先を完全にコントロールできない交通があったとしたら・・・

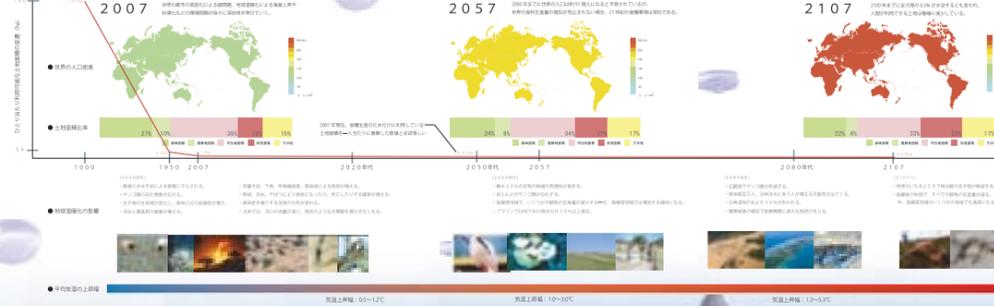
現在の交通は、目的地に向かう一直線の移動を前提としており、そこでは、いかに早く、大量の人間が目的地に到達できるかというスピードと効率をひたすら追求されている。しかし、こうしたスピードと効率を優先する社会が、今日の環境問題を引き起こしたことは誰の目にも明らかである。そこで我々は、未来の交通システムとして、風に乗って浮遊する一人用の極小住居を提案する。移動は、基本的に風任せであり、目的地をあらかじめ定めることも、連さを懸うことも無意味となる。目的地に到達することではなく、遊牧民のように、生きていくために移動するのであり、あえて言えば、移動それ自身が目的となる。この「浮遊住居」を未来の交通形態とすることで、多大なエネルギーを消費して効率を追求するFastな世界から、ゆったりと時間の流れるSlowな世界へと必然的に移行するだろう。



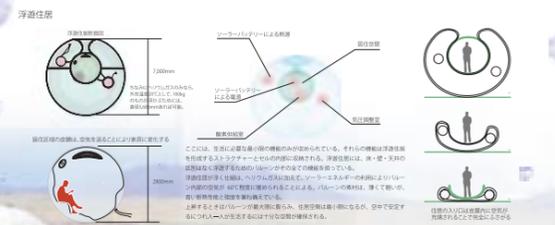
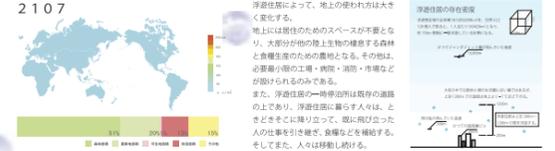
社会の変革 浮遊住居によって、社会は劇的に転換する。

現在の社会	目的地に向かう移動	定住	都市	効率 / SPEED	所有	集団 / 組織	明確な職業区分	国境のある世界
もうひとつの未来	移動それ自身が目的	非定住	非都市	のんびり / ふわふわ	非所有	個人が基本単位	その時々に関わり続ける	国境のない世界

深刻化する環境問題



もうひとつの未来予想図



IT技術を支える「浮遊住居の社会」

浮遊住居の社会を支えているのは、コンピュータやネットワークといったデジタル・インフォメーションの技術である。どこでも個人が繋がる。また、ものをつくること以外のほとんどの作業は、浮遊住居内で完了させることができる。また、特定の職業を持たず、その時々、一時的に降り立った場所で、さまざまな仕事を引き継ぐことができるのも、人工知能をはじめとした支援システムが駆動しているからである。

浮遊住居 そして／あるいは遊牧民(ノマド)のためのユートピア 浮遊する住居と地球環境

移動すること自体が目的 風に乗って浮遊する住居

2107年、今世紀末に到来する深刻な環境危機と人口の爆発的増加の問題を乗り越えて、もし人類が22世紀を無事迎えることができていたとしたならば、その時、社会や都市、そして交通手段のあり方は現在とは相当異なったものになっているだろう。

2107年の世界では、人間は移動し続けなければ生きてはいけない。なぜならば、現在のように定住し続けられれば環境問題の悪化が加速するだけだからである。そこで私たちは、風に乗って浮遊する住居を提案する。この住居は人1人が住まうことのできる極小住居であり、この“浮遊”を未来の交通形態とするならば、それは目的地に到着することが移動の目的ではなく、移動することそれ自体が目的となる。

都市に対する需要増と 地球環境の破滅

世界の都市は今後ますます高密度化が進むだろうと予測されるが、これ以上の都市の高密度化は、都市に対するあらゆる需要を増加させ、その結果地球環境問題はさらに悪化することになり、われわれは確実に破滅を迎えるだろう。

地球温暖化による海面上昇や砂漠化などの環境問題、人口爆発による食糧・住宅・用水ならびに雇用の危

機など、解決すべき問題は数多く存在する。

2050年までに世界の人口は約91億人になると予測されている。世界の食料生産量の増加がこれ以上見込めないとすれば、21世紀の食糧事情は深刻である。しかし、一方では砂漠化が進み耕作可能な土地が減少し、また海面上昇により2100年までに全大陸の0.5%が水没するとも言われ、人間が利用できる土地は減少している。このことから明らかなように、限られた土地利用の問題は重要である。

FastからSlowへ 現在と大きく異なる2107年の世界

2107年の世界は下に示す点で現在の都市とは大きく異なったものとなる。

- ・移動 → 非移動
- ・定住 → 非定住
- ・都市 → 非都市
- ・効率 → 非効率
- ・所有 → 非所有
- ・集団 → 個人
- ・定職 → ワークシェアリング
- ・国境 → ボーダレス

現在の社会が常に「Fast」を求めながら動き、これが現在の地球環境問題を生み出しているならば、未来の社会は新しい交通の形態によってこの概念が消滅し、非効率「Slow」な社会に必然的に変化していく。

program1/人口の離散

22世紀初頭の人口を世界全体の空中の体積でならず。それにより、都市の高密度化による地球環境問題の影響を無くし、人間による地球環境への負荷を最小限にとどめる。

program2/土地の緑化・農地の増加

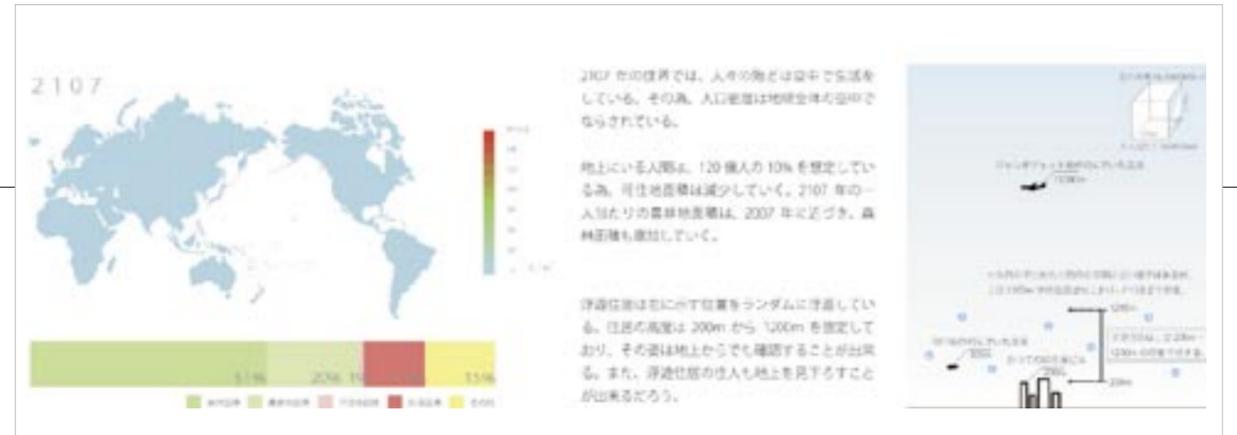
食料の生産と消費のバランスを整えるための農地と、大幅に減少した森林などの自然は増加する。

浮遊する住居による 地球環境の再生

住居群は、それぞれ風に漂いながらランダムに移動を続ける。その都市の形態は日々変化し続け常に不定形である。このような新たな移動手段は地球環境の様々な問題を解消し、人類の未来は再生する。

浮遊住居によって、地上の使われ方は大きく変化する。地上には居住のためのスペースが不要となり、大部分が他の陸上生物の棲息する森林と食糧生産のための農地となる。その他は、必要最小限の工場・病院・消防・市場などが設けられるのみである。

また、浮遊住居の一時停泊所は既存の道路の上であり、浮遊住居に暮らす人々は、ときどきそこに降り立って、既に飛び立った人の仕事を引き継ぎ、食糧などを補給する。そしてまた、人々は移動し続ける。



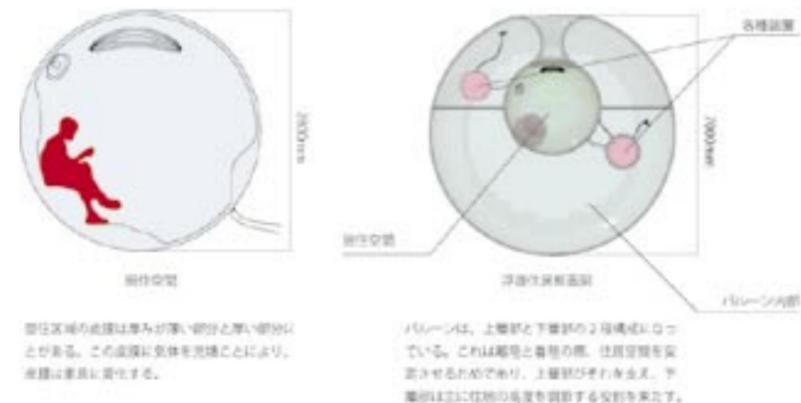
分岐点の設定

世界はあるときを境に2つの未来に分岐する。それは2050年から2100年の間を想定している。もしその区間のある時点で、人間が現状を改め、新たな時代に向かおうとしなければ世界は確実に破綻するだろう。そして、もし世界が新たな時代に向かうとするならば、少なくともそれは、人間は何らかの新たな価値観を身につけ、生き延びていることを意味している。

浮遊住居

浮遊住居には、生活に必要な最小限の機能のみが収められている。それらの機能は浮遊住居を形成する皮膚の内部に収納される。

浮遊住居には、床・壁・天井の区別はなく、浮遊するためのバルーンがその全ての機能を担っている。浮遊住居が浮く仕組みは、ヘリウムガスに加えて、ソーラーエネルギーの利用によりバルーン内部の空気が60℃程度に暖められることによる。パ



審査員講評

今村創平氏

テーマが環境問題と大きいので、あえて100年後とテーマの年代を違反した意欲は買えるし、またプレゼンテーションの完成度も高い。泡のような乗り物も、イメージとしてだけではなく、実現するための技術的検討をしたことも評価できる。ただ、100年後と遠い未来にしたことで、かえっていくぶんナイーブな提案になってしまっていないか。

アニリール・セルカン氏

とても夢がある作品だと思う。いまのエレベーターとは全く違う発想で描かれているところは気に入っている。ノマドというのもいい。研究の方向がはっきりしているし、それが1枚のパネルに上手く表現されている。

四方幸子氏

こういう構想は好きだし、現代の状況をよく反映しているとも思う。だが、バルーンなど60年代的な要素も多く、新鮮味に欠ける。いまの時点で、それも2107年として提案するには古すぎるのではないだろうか。

横矢真理氏

小学校のときに自分がほしいと思っていたものがここにあったので驚いた。これなら車にぶつかっても安心だし、空に浮かぶ案もいい。ただし、2107年はルール違反。

原田豊氏

ベースはきちんと押さえていると思う。新たな交通システムではあるが、行き先を完全にはコントロールできないというところは気になった。2107年という今回の条件とは異なる案を出してきた点も評価できない。